

田樂考

平貞大輯

續日本紀卷九之聖武皇帝紀曰天平十四  
年正月丁未朔壬戌天皇御大安殿宴群  
臣酒酣奏五節田儻

貞大曰五節田儻六田儻二五曲ノ  
節奏ヲ成サシムル歎田儻ハ後代ノ

田樂歎決シテ是ト定難ケレトモ其

名ノ相類セルニ因テ茲ニ記出



榮花物語

御著 裳卷

曰加茂乃系なまも

まへ

五月は殿の大宮土門殿おれ月一せそ  
殿の西あなまをこしと西望せしと  
思ふしと此殿の西まの平倉の西八殿  
のまをこしとせぬのまをこしと  
けしゆりしとせぬのまをこしと  
この田りんは例のまをこしとせぬの  
まをこしとせぬのまをこしと

のまをこしとせぬのまをこしと  
あなまをこしとせぬのまをこしと  
まをこしとせぬのまをこしと  
ちまをこしとせぬのまをこしと  
東の對まをこしとせぬのまをこしと  
まをこしとせぬのまをこしと  
まをこしとせぬのまをこしと  
まをこしとせぬのまをこしと  
まをこしとせぬのまをこしと  
まをこしとせぬのまをこしと



一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百











ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき  
ふかきからしむるの御とまふかき

志す 刻 核 樂 の 一 海 と し 能 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事  
事 成 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

古事談 卷 曰 永長元年 大田樂事 或人



記云七月十二日參內祈年敕奉幣定也今日殿上人田樂事卅餘人云云頭辨依所勞不參裝束或兼被仰定紅帷有風流以冠筥蓋為笠差貫有風流向主藏人少紉言成定定勅火笠比夕志舟凡流事外也已上藏人所調備一足頭雅懸鼓經忠高定宗輔懸鼓修理大夫頭季朝臣右中辨宗忠朝臣左中將頭實朝臣兵衛佐實隆侍從師重少輔

懷季銅伯子前兵衛佐長忠朝臣右少辨時範民部太輔行信治部太輔敦兼佐良兵衛佐師時少將頭通左馬頭師隆因幡守長實周防守經志藏人盛家小鼓權辨重資朝臣馬權助家定氏部權太輔基兼美作守基隆等云云笛吹右馬頭兼實朝臣藏人式部丞宗仲也暫遊南殿次於御



曹司敷刻成其曲秉燭之後引參一條  
院深吏又歸參內裏云云予偷伺具之  
宛如夢世間事難計難知可以驚耳目  
云云十三日今日一院殿上人田樂兼內殿  
上人今輩不供奉但長實經忠此二人猶  
參仕依堪能云云裝東風流思云云  
以就內裏終夜田樂云云上達部尻奏四  
人左兵衛督基忠治部卿通俊石兵衛督

雅俊宰相中將宗通等云云皆直衣  
持高扇付大物忌云云如此日夕夜々  
在々所々諸院諸宮又殿開白藏人  
所已下卿村、田樂或被召貴所或  
參諸神社云云

朝野群載卷之三師江納言洛陽田樂  
記曰永長元年之夏洛陽大有田樂  
之事不知其所起初自閭里及公門



高足一足腰鼓振鼓銅鈸子編木殖  
女養女之類日夜無絕喧嘩之甚能  
驚人耳諸條諸坊諸司諸衛各為一  
部或諸寺社或滿衛衢一城之人皆如  
狂馬蓋靈狐之所為也其裝束盡善  
盡美如彫如琢以錦繡為衣以金銀  
為飾富者傾產業貧者改而及之郁  
芳門院殊催獻感姑射之中此觀尤

盛家之所引黨豫參不唯少年緇  
素成群佛師經師各率其類帽子繡  
襴襪或奏陵王拔頭等舞其終文殿  
之衆各企此業孝言朝臣朝臣以老  
之身勤曼延之有俊有信季綱敦基  
在良等朝臣並折桂射鵠之輩不偏一  
人或著礼服或被申冒或稱後卷驍  
勇為隊入夜參院鼓舞跳梁摺染



成文之衣袴諸令所禁而檢非違使又  
供奉田樂皆著摺衣白日渡道蓬壺容  
又為一黨步行參院侍臣復參禁中權  
中納言基忠卿捧九尺高扇通後卿兩  
脚著并藺水參議宗道卿著藁屣切  
何況侍臣裝束惟而可知或裸形腰卷  
紅衣或放髻頂戴田笠六條二條往復  
幾地路起埃塵人速車近代奇怪之夏

何以尚之其後院不豫不經幾程遂以  
崩御自田樂御覽之尸差車脚葬送  
車爰知妖異之所崩人口不及淑人君  
子誰免俗事哉

百練抄卷五曰永長元年七月十二日殿上  
侍臣有田樂之事凡近日上下所莫不  
翫田樂禁裏仙洞無他營侍臣僧者  
至廳官預此事八月七日都芳門院崩



廿二太上皇一女  
當今同胞好

續世純物語 卷之第七 曰純年永長 卯卯田  
根合之卷 六年

樂々々 願ふ道々々 ありあけの神のやまに  
此事ハ海なり 昔は 西の山あり 海く 西の  
世々々 昔々々 昔々々 昔々々 昔々々  
こと々々 ありあり

今昔物語 卷之第七 本朝世俗 今昔比叡山ノ

西塔ニ住ケル教圓座主ト云學生有ケリ

物可咲云テ人ヲ咲スル説經教化ヲナシ

シケル其レカ未タ苦クシテ供奉ト云テ

西塔ニ在テル時ニ近江國野洲ノ二矢馳ト

云處ニ在ケル郡司ノ男年来極ク此人

心有テ山ノ不合ノ事共十ト常ニ訪テ

六教圓若キ程ニテ貧キ身十レ六善ク



思テ過ケル程ニ彼郡司之男ノ云ク年  
来之願ニ依テ佛堂ヲナシ造リ奉テ候  
ラ此レ懃ニ告テ供養シ奉ラレトナシ思  
ヒ給フル年来ノ睦ニ御ママシナレヤ何レ  
亦懃ニ仕ヘカラニ事共ヲモ仰ラレニ  
隨テ構候ヘキ也年罷老テ候ヘハ偏  
後世ノ為ト思ラナン候フト云ヘハ教圓  
諸ケニ事ハ糸安キ事也其ヨノ未朝テ

三津ノ邊ニ迎ヘヨ舩ヲ遣セ給ヘ亦矢馳ノ  
津ニ馬ニ三足鞍置テ遣セ給ヘキ也然ラハ  
功德懃ニ為ルニハ舞樂ヲ以コソハ供養ス  
レ此ハ皆極樂天上ノ様也但シ其レハ樂人  
ナト呼ヒ下スハ大事ナレハ否呼給ハシナト  
云ヘハ郡司カ云ク樂人ハ巳カ任井候フ津  
ニ候ヘハ樂仕ラニ事ハ事ニモ候ハス安キ  
事候フ然レハ樂ヲ仕ベキニロソ候ナレ



ト云ハ教圓供奉ノ云ク然夕ニアラハ極メ  
タル功德ニ成テ疾々返テ其日ノ曉ニ三  
津之邊ニ行テ船ヲ待ヘキ也ト云ハ郡  
司喜テ羨ハリ久御船ヲ疾ヲ參セント  
云テ去リ又其日ニ成テ曉ニ来夕暗キ西  
塔ヨリ急キ下ケ津之邊ニ白くト明ル  
程ニ行タレハ船ハ兼テヨリ儲ケタリケン  
ハ兼テ行ケルニ矢馳ニ渡ル程一時許ノ

渡ナレハ巳時許マフ津ニ渡リ著キタリ  
ケレ見レハ前ニハ鞍置タル馬三足ト云シ  
カトモ十餘足許引立タリ亦白装束  
シタル男共十餘人許立並タリ凡フ極々  
ノ下人共四五十人許村々ニ立ケリ供奉  
此レハ物見ル者共ニヤ有ラン何ヲ見ツト  
思テ東西ヲ見廻セハ露見ヘキ物モ只今  
見エス船寄セツレハ下リテ引寄セタル



馬ニ乗リス共十ル法師二人亦馬ニ乗セ  
 テ前ニ折立タルニ今十餘足許ノ馬ニ此  
 白装束シタル男共ハラクト乗リ又  
 此男共ハ迎ヘ遣セタル也ケリト其時ニ  
 ナム心得ケル日ノ高夕成スレハ馬ヲ早ノ  
 テ急キ行ニ此白装束ノ男共ノ馬ニ乗  
 タル或ハヒ夕黒ナル田樂貞文案樂ノ字ハ鼓ノ  
字ヲ寫違タル歎栄花  
物語ニ田ツミトヲ腹ニ結付テ袂ヨリ肱ヲ取出シ  
見エタリ

テ左右ノ手ニ桴ヲ持タリ或ハ笛ヲ吹キ

高拍子ヲ突キ花羅欵ヲ突キ貞大案栄  
花物語ニサ

ラト云モ之ツキトアリ  
見タリ田樂ナル故農具ヲ舞具トスル欵  
異本作桃ハ非ナリ  
 八貞人案ハ農具也和名抄ニ江布利  
把ノクハ之無齒者屬ハト同抄  
 田樂ヲニツ物三ツ物ニ儲テ打嗶リ吹ワレシ  
 狂フ事限ナシ供奉此レヲ見テ此ハ何ニ  
 スル事ニカ有ラムト思ハ凡敢テ否同ズ而  
 ル間此田樂ノ奴原或ハ馬ノ前ニ折立テ

狂フ事限ナシ供奉此レヲ見テ此ハ何ニ  
 スル事ニカ有ラムト思ハ凡敢テ否同ズ而  
 ル間此田樂ノ奴原或ハ馬ノ前ニ折立テ



或ハ馬ノ後ニ在リ或ハ蒼平ニ立テ打行ク  
然レハ供奉今日此卿ノ御靈會ニヤ有ラ  
ント惡ハ極カリケル折ニシモ来リ會セテ  
此ル奴原ノ中カニ具シテ行ク物狂ハシキ  
態カ予不意ニ知タル人ヤ會ハント思ハ  
袖ヲ以テ顔ヲツブト隠シテ行クニ郡  
司ガ家漸ク近ク見ユ家ノ門ノ前二百十  
ノ人立舉テ見ル疾ク急テ行カハトスルニ

此田樂奴原供奉ニ向合テ鼓ヲ打テ向ヒ

左ノ羅ヲ笠ノ鉉端ニ突キ懸テ杵ヲ捧テ

頭ノ上ニ招キ此ニ行モヤラセス腹立シキ

事限ナシ辛クシテ郡司カ門ノ許ニ行著

テ馬ヨリ下ントスル程ニ郡司親子出来

テ厄右ノ馬ノ口ヲ取テ乗セ乍ラ門ノ内ニ

傳キ入レハ供奉此ナセソ只共ニテ下セト

云トモアナ忝ナヤト云テ耳ニモ聞入ス然テ



此田樂ノ奴原ハ馬ノ左右ニ列シツ、次キテ  
遊ヒテ入郡司能ク仕レ已等ト云ハ鼓打  
ツ者三人馬ノ前ニ向テレ仰張り極ク打  
行ケハ供奉訖テ疾ク下シテハ吉カルヘキ  
ニ此ク狂セ行ケハ馬ヲモ歩セズノト馬ヲ歩  
スル程ニ家ノ内市ヲ成シテ惶ル辛クシテ  
廊ノ有ル妻ニ馬ヲ押寄セタレハ喜セナカ  
ラ下リ又設タル所ニ居ヘツ先ツ心モ得又事

ナレハ供奉郡司ニ彼ノ郡司ノ主聞給ヘ  
此田樂ハ何ノ料ニテセサセ給フツト問ヘハ  
郡司カ云ク西塔ニ参リタリシニ懃ニスル  
功德ニハ樂ヲナニスルツト被仰シカバ儲ケ  
候也其レニ講師ヲハ樂ヲシナム迎ヘ奉ル  
ヘキト人ノ申セハ参ラセテ候セツル也ト  
供奉其ノ折ニソ此奴ハ田樂ヲ以テ樂ト  
ハ知タリケル也ト心得テ可咲思ヘトモ







安藝門院の時の田樂ハ童舞白拍子田樂  
と連くものゝ又中野ハ又ハ舌物ト云  
田樂法師のよもいんえられハ文永の頃ハ既  
田樂を以て家業とする法原ありし  
太平記卷之五曰又其比元年洛中ニ田樂ヲ弄フ  
事昌ニシテ貴賤舉リテ是ニ著セリ相  
摸入道此更ヲ聞及ヒ新座本座ノ田樂  
ヲ呼下シテ日夜朝暮ニ弄フ事他事ナシ

入興ノ餘ニ宗位ノ人名達ニ田樂法師ヲ  
一人ツ預ケテ装束ヲ飾ラセケル間是  
ハ誰カシ殿ノ田樂彼ハ何カシ殿ノ田樂  
ナント云テ金銀珠玉ヲ送クシ綾羅錦  
繡ヲ飾レリ宴ニ臨テ一曲ヲ奏スレハ相模  
入道ヲ始トシテ一族大名我劣ラシト直  
岳大口ヲ解テ抛出ス是ヲ集テ積ムニ  
宛モ山ノ如シ其費幾千万ト云数ヲシラズ



貞丈曰田樂ノ法師ノスル業ニ成リニ  
事既ニ上ニ記シ又木座新座ト  
テ座ヲ立定メタル事ハ茲ニ見エタリ  
同卷之茅曰今年貞和五年多ノ不思議打続  
ク中ニ洛中ニ田樂ヲ翫事法ニ過タリ大樹  
是ヲ興ラル、事又類ナシサレハ万人午足  
ヲ空ニシテ朝夕是カ為ニ嬉費ス關東  
込ヒニトテ高時禪門好ミ翫シカ先代ノ

一流断絶シ又ヨカラヌ事ナリトフ申ケル  
同年六月十日抖擻ノ沙門アリケルカ四  
條橋ヲ渡サントテ新座本座ノ田樂ヲ  
合セ老若ヲ分テ能較ヲクセサケル四條  
何原ニ棧敷ヲウツ希代ノ見物ナルヘシ  
トテ貴賤男女コフル事斜アラス公家ニハ  
摺籬大臣家門跡ハ當王梶井ニ品法親  
王武家ハ大樹是ヲ興セラレシカハ其以下ノ



人ハ申ニ及ス卿相雲客諸家ノ侍神社  
寺堂ノ神官僧侶ニ至マテ我劣ラシト  
棧敷ヲ打五六八九寸ノ安郡ナトヲ鐫貫  
テ圍ハ十三間ニ三重四重ニ組上ケ物モ夥ニ  
ク構ヘタリ已ニ時刻ニ成シカバ輕軒香車  
地ヲ争ヒ輕求肥馬繫ニ所ナシ幔幕風ニ  
飛揚シテ薰香天ニ散満々新本ノ老若東  
西ニ幄ヲキテ兩方ニ橋懸リヲ懸タリケル

樂屋ノ幕ニハ纈纈ヲ張り天蓋ノ幕ハ金  
襪ナレハ片ト風ニ散満シテ炎ヲ揚ルニ  
異ナラス舞臺ニハ曲棗繩床ヲ立雙ヘ紅  
緑ノ纒ヲ展布テ豹虎ノ皮ヲ懸タレハ見  
ルニ眼ヲ照サレテ心モ空ニ成スルニ律雅調  
冷々颯聲耳ヲ清ス處ニ兩方ノ樂屋ヨリ  
中門ノ口ノ鼓ヲ鳴シ音取ノ笛ヲ吹き立々  
レハニホヒ薰蘭ヲ凝シ粧ヒ紅粉ヲ盡シ



タル美麗ノ童八人一樣ニ金襴ノ永チヲ  
著シテ東ノ樂屋ヨリ練リ出タレハ白ク  
清ラカナル法師八人薄假粧ノ鐵醬黒  
ニテ色々ノ花鳥ヲ織盡シ染狂タル水  
千ニ銀ノ乱故打タル下濃ノ袴ニ下括シ  
テ拍子ヲ打テ綾蘭笠ヲ傾ケ西ノ樂屋  
ヨリキラメキ渡テ出タル誠ニ由々敷ク  
見エタリケル一ノ彫ハ本座ノ阿古乱拍

子ハ新座ノ彦夜又カ玉ハ道一各神變ノ  
堪能ナレ見目耳ヲ驚スカクテ立令終  
リシカハ日吉山王ノ未現利生ノ新ナル能  
ヲ云猿樂ヲ肝ニ染テソ出シタルカ、ル所ニ  
新座ノ樂屋ヨリ八九歳ノ小童ニ猿ノ面  
ヲキセ御幣ヲ差上テ赤地ノ金襴ノ打  
掛ニ虎ノ皮ノ連貫ヲ蹴開キ小拍子ニ懸  
リテ紅緑ノワリ橋ヲ斜ニ踏テ出タリ



ケル高欄ニ飛上リ丸巡リ八子返テハ  
上リタル在様誠ニ此世ノ物ト見ユス忽チ  
ニ山王神託シテ此奇瑞ヲ示サルハカト感  
興身ニテ餘リケルサレハ百餘間ノ棧敷ト  
モ堪ヘカ子テ座ニモタマラスアヲ面白ヤ  
タヘカタヤト喚キ叫ビケル間感聲席ニ  
餘リツ、暫ハ静リモヤラス  
職人歌合五十番田樂法師ノ歌

左月

田樂の中門ノ名は此の如し  
この細もなほ

左意

よき〜も〜や〜  
おん〜も〜女〜



職人歌合絵  
田楽法師



右榮花物ニ見タル田種ノ田楽後ニ一  
変シテ古事談朝野群載續世継物  
語今昔物語等ニ見タル様ニ常ノ日ノ  
翫ト成リ後ニ又ニ変シテ増鏡太平記  
等ニ見タル様ニ法師ノ家業ト成ノ後ニ  
又ニ変シテ世人翫サルニ依テ本座新  
座共ニ衰微シテ唯毎年春日日光等ノ  
神祭ノ日ニ少ニ其藝ヲ勤ル而已常ニハ



農高ヲ以テ業ト云卜聞及ヒ又

天明三年癸卯六月二日

伊勢平蔵貞文書



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '天明三年' and '伊勢平蔵'.



